

## 動植物園等と連携した生息域外保全等の実施状況

## 1. 動植物園等と連携した生息域外保全等の事例

## ツシマヤマネコ

- ・平成 8 年より 5 頭の野生個体を確保し、平成 11 年より福岡市動物園の協力を得て飼育下繁殖を実施。平成 12 年に初めて繁殖に成功。
- ・危険分散のため、日本動物園水族館協会の協力を得て、9 園で 34 頭を飼育。5 園で繁殖に取り組んでいる。
- ・遺伝的多様性に配慮しつつ安定して繁殖を継続するために、飼育管理技術の向上や人工授精等の新たな技術の開発を進める。

## トキ

- ・平成 19 年より多摩動物公園で分散飼育を開始。いしかわ動物園（平成 22 年より）、出雲市（平成 23 年より）、長岡市（平成 23 年より）でも分散飼育を実施。
- ・平成 19 年に佐渡島に野生復帰ステーションが完成。
- ・平成 20 年より、佐渡島において野生復帰のための放鳥を開始。
- ・平成 26 年に地域再生ビジョンにおいて野生復帰の目標としていた 60 羽定着を達成。

## イタセンパラ

- ・平成 22 年以降、岐阜県世界淡水魚園水族館・碧南市碧南海浜水族館・名古屋市東山動植物園・岐阜県水産研究所において、濃尾平野の個体群の生息域外保全を実施。
- ・国土交通省中部地方整備局が、イタセンパラの生息環境の改善のため、木曽川におけるワンドの底泥浚渫等を実施。また、平成 26 年度には野外池でのイタセンパラ試行放流を実施。
- ・淀川においても、淀川河川事務所によるワンドの保全再生及び大阪府立環境農林水産総合研究所との連携による再導入等が実施されている。

## ムニンノボタン

- ・東京大学の小石川植物園において、生息域外保全や自生地調査等が古くから実施されてきており、昭和 60 年には増殖株の自生地への植え戻しが実施されている。
- ・自生個体の消失が続いており、現在確認できている自生個体は実生株のみ。約 200 株の植栽株が現存している。
- ・神代植物公園、富山県中央植物園、名古屋市東山動植物園、摂南大学薬用植物園、牧野植物園等でも生息域外保全を実施。

## 2. 今後、生息域外保全の取組が必要と想定される種の例

### 哺乳類

- ・オキナワトゲネズミ (CR)、 トクノシマトゲネズミ (EN)、 アマミトゲネズミ (EN)  
生息地の消失や外来生物 (マングース、 ノネコ等) の侵入等により減少しており、特にオキナワトゲネズミは深刻。
- ・ダイトウオオコウモリ (CR)、 オガサワラオオコウモリ (CR)  
生息地の消失等により減少。いずれも生息地が限定されている。

### 爬虫類

- ・ミヤコカナヘビ (CR)  
生息地の消失、天敵 (イタチ、 インドクジャク)、 採取等が減少要因として指摘されている。近年は個体数密度が相当に低くなったと考えられ、目撃することが困難になりつつある。
- ・イヘヤトカゲモドキ (CR)、 クメトカゲモドキ (CR)、 オビトカゲモドキ (EN)  
マダラトカゲモドキ (EN)、 クロイワトカゲモドキ (VU)  
生息地の消失や外来生物の侵入、採取等により減少。いずれも生息地が限定されている。

### 昆虫類

- ・マダラシマゲンゴロウ (CR)、 フチトリゲンゴロウ (CR)  
生息地の消失や外来生物の侵入、採取等により減少。いずれも生息地が極めて限定されている。
- ・ゴイシツバメシジミ (CR)  
食草であるシシンランの減少や採取等により減少。環境省が増殖試験に取り組んでいるが、成功例が少なく、人工増殖技術の確立が必要。

### 陸産貝類

- ・小笠原産カタマイマイ類 14 種 (CR + EN)  
外来生物 (プラナリア類、 ネズミ類、 アリ類) の侵入等により多くは激減。うち 5 種は、緊急避難として環境省が父島での室内飼育等を開始。